

## アカデミック・ポートフォリオ開発ワークショップの試み

松本高志 川畑成之  
(阿南工業高等専門学校)

### 1. はじめに

阿南工業高等専門学校(以下、阿南高専という)では、平成21年から主体的な教育改善活動として、ティーチング・ポートフォリオ(以下、TPという)に着目し、栗田氏の提案した日本に適したワークショップ<sup>(1)</sup>をさらに高等専門学校(以下、高専という)の教員に適した形式に修正し、その実践を積み重ねてきた<sup>(2)</sup>。平成24年3月、国立高等専門学校機構は、国際的な高等教育の質保証の観点から、大学に先駆けて、モデルコアカリキュラム(試案)を公開した。国立高専が養成しようとしている実践的・創造的技術者とそのための教育内容・方法の方針を示したものである。そして、この中で、質保証機能を担保する取組のひとつとして、TPの活用が挙げられている。このように、最近、高専ではTPの認知度が上がり、導入の広がりがみられる<sup>(3)</sup>。一方、最近、米国においてはアカデミック・ポートフォリオ(以下、APという)への拡張が進捗しつつある<sup>(4)</sup>。そこで阿南高専では、豊富なTP実践をもとに平成24年3月、AP開発ワークショップを試行した。本稿では、その実践結果を報告する。

### 2. APについて

APとは、高等教育機関の教員にとって業務の3本柱と言える教育、研究、サービス活動のバランスとその有効性を内省とエビデンスによって明らかにするものである。米国の第1人者であるピーター・セルディン氏によると、人事評価にも教育改善にも活用できるとされている。APはTPを部分的に包含することから、近年米国ではAPが広まりつつある。

アカデミック・ポートフォリオの概念を図1に示す。教育、研究、サービス活動それぞれの度合いを示す円の大きさは個人差が大きいと考えら

れる。教育活動のエフォートが高い人もいれば、研究活動のエフォートが高い人もいる。また、それぞれの関連性や、相互作用の度合いも個人ごとに大きく異なるものである。教育活動と研究活動の重なり部分が大きかったり、研究活動とサービス活動の重なりが大きかったりする。サービス活動がほとんどない人もいるかもしれない。AP開発ワークショップは、このような各自の活動を振り返り整理し、さらにメンターとの個人ミーティングや内省によって各活動の重なり(integration)を明らかにするものである。

平成24年1月、栗田氏は大学評価・学位授与機構小平本館においてAP開発ワークショップを日本で初めて開催した。このワークショップではTP作成済み者を参加対象とすることにより、米国で開催されているワークショップより時間短縮が試みられた。また、APの本文全体をA4サイズで15~18ページ程度にするため、あらかじめ作成している10ページ程度のTPを減量する事前準備とAP用に開発されたスタートアップシートも事前課題として課せられた。ワークショップの参加者は、メンター経験、ワークショップ主催経験が豊富だったこともあり期間内で問題なく作成できた。

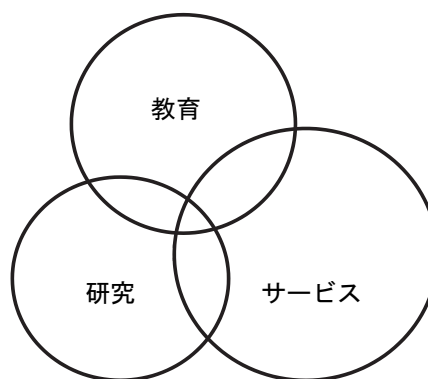


図1 アカデミック・ポートフォリオの概念

### 3. TP 作成ワークショップの実績

阿南高専では、SPOD との共同開催や他高専における TP 作成ワークショップ開催支援を含め、11 回のワークショップを開催した。このうち、3 回は他高専におけるワークショップ開催を支援したものである。これらの結果、本校の教員については 70%以上がワークショップに参加し、TP を作成するに至っている。そして、これまで延べ 100 名以上のワークショップ参加者を得ている。

### 4. 阿南高専における AP ワークショップ

栗田氏のワークショップを参考にして、平成 24 年 3 月、阿南高専では初めて AP 開発ワークショップを開催した。また、同年 9 月には第 2 回目を開催し、AP 作成者は 4 名となっている。これらのワークショップは既存の TP ワークショップと同時開催とした。大学評価・学位授与機構が行ったワークショップでは、TP 作成と AP 作成の手順が一部異なり、TP と AP のメンターは区別されていた。本校では、AP 作成に必要で、TP とは異なるワークを事前準備とし、当日は TP 作成時と同様に個人ミーティング、振り返りによる内省とドキュメント作成に統一した。この結果、メンターは AP と TP を混在させて担当することができ、少ない貴重なメンターでの効率が上がった。

まだまだ試みの段階であり参加者は少数であるが、事後アンケートの一部を紹介する。「あまり意識してなかった教育－研究－サービス間の相互関係と、それらの背後にある核となるものを考える良い機会であった」、「ワークショップで気づいた核となるものを大切にしながら、より多くの取り組みに挑戦していく、きっかけが得られた」という肯定的な意見、「校務（サービス）は求めてのみでなく、指示されての校務の場合が多い。統合（integration）は困難な場合もあるのではないか」、「昇格資料にする等、FD 活動として進めるべき」という問題提起もあった。

最近では、多くの学校で個人の年度計画を提出し、それを基にした年度の達成度報告をしていると思われる。また、昇格時には研究業績、教育業績、校務や地域貢献のサービス業績についての申

告書が存在すると思われる。AP をこれらの書類と比較すると、AP に添付するエビデンスは上記の書類と同等と言える。これまで存在する上記の書類は客観的データを記したものであった。一方、AP は教育、研究、サービス活動について個人の理念を明らかにしたうえで、その実践・成果についてエビデンスをもって説明する点が異なっている。重複した書類作成は効率的ではないため、今後 AP が活用されるためには類似した既存の書類作成との棲み分けを検討する必要がある。

### 5. おわりに

今後、教育の内部質保証に関連して教員の活動について説明責任を求められることが予想される。また、研究業績ばかりではなく、教育活動を含む教員の業績について適正な評価が期待されている。日本における AP は始まったばかりであり、どのような方向に進展するかは未知数であるが、それらに適した有望な手法の一つであると考えられる。現在のところ、作成者が少ないことから評価することは難しい段階であるが、ワークショップ開催の実践を積み重ねながら方向性を探っていきたい。本取組は、東京大学の栗田佳代子氏の助言を受けながら推進しており、ここに謝意を表す。

### 参考文献

- (1) 独立行政法人 大学評価・学位授与機構：日本におけるティーチング・ポートフォリオの可能性と課題－ワークショップから得られた知見と展望－，評価結果を教育研究の質の改善・向上に結びつける活動に関する調査研究会報告書(2009)
- (2) 松本高志，坪井泰士，奥本良博，笹田修司，清水栄子：FD 活動としてのティーチング・ポートフォリオの実践－高専に適した TP の開発－，平成 23 年度 工学教育研究講演会 講演論文集，pp. 534-535(2011)
- (3) 松本高志，奥本良博：「高専におけるティーチング・ポートフォリオの広がり」，大学教育カンファレンス in 徳島，pp. 54-55(2012)
- (4) ピーター・セルディン，J. エリザベス・ミラー，大学評価・学位授与機構監訳・栗田佳代子訳：「アカデミック・ポートフォリオ」，玉川大学出版部(2009)